

みやざき 芸術協

第124号 令和6年3月19日発行

題字：黒木淳吉

〈目次〉

第26回みやざき文学賞	2
県民芸術祭助成事業	5
第33回芸術文化賞	6
会員だより	7
県からのお知らせ	7
アーツカウンシルみやざきの活動	8

ホームページアドレス <http://www.miyazakigeibun.jp> メールアドレス geibunky@miyazakigeibun.jp



宮崎県芸術文化協会 評議員 濱田 倫紀

食文化考

「ワインは
コミュニケーションツール」

ワインに限ったことではないが、お酒を飲むと食卓は一挙に楽しくなる。「酒は憂いの玉帚」（酒は心の憂いを掃き去るの意）とも言う。そしておいしい肴（料理）は芸術品になる。食卓にちよつと凝った酒と肴を揃え、話しながら食べるより人間らしい食事になる。



山桜 背景の建物は西都市の西都原古代生活体験館

（写真提供：吉野中瓶）

若い頃、祖父が毎晩毎晩同じ焼酎と肴で晩酌をしているのを見て下流に思っていたが、その自分がいま、祖父と同じように何十年も晩酌を続けている。そして、夕方になると、「生きがい」すら感じるようになってしまった。

「食文化」とは民族、集団、地域、時代などにおいて共有され、それが一定の様式として習慣化され、伝承されるほどに定着した食物摂取に関する生活様式のことを言う。晩酌も講釈を述べ、酒・肴に凝るようになると立派な食文化と言える。

退職後（二十数年前）、イタリア発祥のスローフード運動に出会い、三、四年、毎年イタリア旅行を続けた。それこそ一回二週間の食文化体感の旅。いわゆるアグリツーリズムである。泊りは田舎の小さな宿。どこの宿もおしゃべりで愉快的なシェフがいて料理を自慢し、無性にワインをすすめる。毎晩、宴会状態になるが、何か文化の匂いを感じ、心地良かった。

日本ではこのアグリツーリズムのことを「民宿」と訳しているが、日本の民宿とは趣が異なる。本場のアグリツーリズムは農業に触れるほか、絵画や音楽、美術などの芸術団体、語学学校、料理学校と提携して宿泊客が教養を高めるためのサポートもしてくれる。

日本人も最近このようなアグリツーリズムに関心を持つようになってきたが、日本人の意識は都会で遊ぶより、田舎の方が宿泊費など安いだろうという選択ではないのか。人間金勘定で生きるようになると真の豊かさは享受できなくなる。スローライフには、しっかりとした経済観念と崇高な倫理観が必要である。しかし、これは人生をクリエイティブに生きる人なら誰でも可能なことである。

令和五年度県民芸術祭 第二六回 みやざき文学賞

○募集結果

今年度のみやざき文学賞は、江戸時代や明治時代、太平洋戦中など過去の時代を背景とする作品も多く、自分の身近な現実題材をとる作品も多く寄せられました。作品の応募総数は六一六点で、前年度より約八二点減少しました。昨年度に引き続き若い世代、特に大学生や高校生から多くの作品が寄せられたことから、三〇歳代以下の作品が三割弱を占めました。

○募集部門

小説・随筆・詩・短歌・俳句・川柳の六部門

○作品の募集

六月上旬に募集要項を県・市町村・各学校・報道機関等へ発送・広報するほか、主催者ホームページにも記載。八月一日から九月九日作品受付期間として募集しました。

○入賞・入選者の発表

十一月一〇日(金)、入賞・入選者を報道機関に発表・通知しました。

○表彰式及び審査委員等と入賞・入選者との懇談会

令和六年二月二二日(木)に、宮崎観光ホテルにおいて、入賞・入選者をはじめ、関係者およそ一〇〇名を招いて行われました。入賞者には公益財団法人宮崎県芸術文化協会岩

切裕敏会長から賞状・賞金が授与され、その後部門ごとに、審査委員・運営委員と入賞・入選者との懇談の時間が設けられました。

○作品集

入賞・入選作品を顕彰するため、作品集「2023 みやざきの文学」第二六回みやざき文学賞「作品集」を令和六年二月に刊行し、入賞・入選者及び関係機関に頒布しました。審査委員の審査講評等も掲載しています。作品集は事務局のほか、葛屋書店宮崎高千穂通り店、田中書店(宮崎市)にて本体価格一五〇〇円で販売しています。

※購入ご希望の場合は、事務局にお問い合わせください。

○入賞・入選者

【小説】

- 一席 松崎 祥夫 延岡市
「大地の果てに在るところ」
- 二席 土井 健 都城市
「姑が残したもの」
- 三席 内村 光寿 P 都城市
「賽の河原」
- 佳作 蛭原 拓也 日南市
「白い河」
- 鳥海 美幸 都城市
「繭の中」
- 野々上万里 延岡市
「柔らかな手」

【随筆】

- 一席 関屋 忠興 宮崎市
「小さな旅」
- 二席 甲斐 正樹 延岡市
「揺れる言の葉」
- 三席 今村 文香 宮崎市
「ブラックホール」
- 佳作 二見 順雄 日向市
「あれから半世紀」
- 恵利 清明 宮崎市
「幸せの使者」
- 長田寿磨子 宮崎市
「K君のこと」
- 浅葱 水人 P 都城市
「普通の欠落」
- 前田 倅来 宮崎市立大宮中学校
「日常って何だろう」

【短歌】

- 一席 上米良綾子 宮崎市
「わくわくの一年生」
- 二席 林田 美紀 宮崎市
「奥高千穂路」
- 三席 宮本知佐子 宮崎市
「楠並木通り」
- 佳作 今村 文香 宮崎市
「とくとく」
- 守矢 真冬 P 尚学館中学校
「通り雨」
- 宮崎・へぼ助 P 宮崎市
「野良猫と家猫」
- 蘭田 潤子 宮崎市
「台湾」
- 山田 幸子 P 宮崎市
「届くべき人へ」

【詩】

- 一席 福島 恵 新富町
「逢魔ケ刻」
- 二席 長友 聖次 宮崎市
「脱皮」
- 三席 美根 健一 日向市
「嵐のあと」
- 佳作 小川 律子 都城市
「雨だれ」
- 渥字衣見子 P 宮崎市
「悲しみのまち」
- 多田ゆか理 P 宮崎市

【俳句】

- 一席 亜灯りりな P 宮崎市
「月光へ」
- 二席 大爺真理子 延岡市
「八月の孤独」
- 三席 橋本 耕二 都城市
「夏終る」
- 佳作 森山 淳子 延岡市
「洪団扇」
- 高橋 敬子 延岡市
「島人」

宇那原 純 P 宮崎市

「天地六」

近沢 恒典 都城市

「見える？」

「渡り鳥」

本田 雅子 宮崎市

「五つ」

中武 弓 宮崎市

「プルシアンブルーの小舟」

伊藤 容子 宮崎市

「都井の火祭り」

帯谷 到子 尚学館中学校

「残像」

吉岡 朋子 P 宮崎市

「無花果」

【川柳】

一席 福島 洋一 宮崎市

「生きる」

二席 植田のりとし P 宮崎市

「林住期」

三席 尾崎 雅子 宮崎市

「道」

佳作 岩切 義山 P 国富町

「民生児童委員」

細山田吐夢 P 宮崎市

「普通の日」

松崎 祥夫 延岡市

「農夫」

河野 正 延岡市

「現在地」

肥田木間明 P 宮崎市

「免許返納」

※佳作は受付順
※P…ペンネームの略

審査講評

○小説

江戸時代、明治時代、先の戦争の時代を背景とするものが多かったが、一席の作品のように、現代に通じる

主題がないと、その作品の意図が伝わらない。

宮崎県の風土を感じさせるものの描き方に力強さを感じ、共感もできた。

一席「大地の果てに在るところ」について

日清戦争後に「村田式銃」の威力証明のために北海道で「試し撃」を任された兵士の物語。北海道の原野でのヒグマとの対決の際の自然との対話が内的に語られ、案内役のアイヌの古老が「自然の象徴として崇めるヒグマを試し撃ちの相手にするとは！」と言い、それに対して私は「試し撃ち」をする自分とはいったい何者なのかと自問する場面など素晴らしい出来映えだった。

村田銃を猟銃として扱って下げるために銃の効力を熊で試す。朝鮮半島での狙撃兵としての体験とオーバードラップするように描かれているところがよい。宮崎出身で、狙撃兵として生きる自分に疑問をもち、この一発を最後に、父母のいる故郷へ帰ろうとする気持ちに共感できる。アイヌの古老との対比にも、感じ入る。

○随筆

高校生・大学生で全体の四三・九%を占める。ところが三〇〜五〇代が一〇・三%と極めて少ない。働き盛りで生活にゆとりがないことは想像できるが、忙しい人ほどよく本を読むというデータもあるので、今

後に期待している。今の高校生・大学生が一〇年後、こぞって応募してくれるといい。

現代の社会を映し出すさまざまなトピックも取り上げられた（女性の産後鬱、外国人、発達障害、新しい家族の形態、ヤングケアラーなど）。

一席「小さな旅」について

四歳の時、筆者の初孫になったMは、結婚した二男の妻が連れてきた子どもで発達障害がある。筆者は「受け入れたい」「受け入れなければならぬ」という気持ちと迷いや葛藤を抱えている。小学校一年生となったその孫との小さな旅。筆者の錯綜する思いを超えて、小さな旅の終わりに孫は自分から手をつないできた。感動の一文。

○詩

自分の身近な現実題材を取るという意識は広がってきている。現代詩を読んでいるか否かのあたりが、まだ不十分である。視野を広げて欲しい。

一席「逢魔ケ刻」について

筆力もあり、構成もすぐれた一編であるが、題名には一工夫を要する。題名も作品の一部である、という意識を忘れないで欲しい。

大変良く書けていて、比喩もあり、奥深い作品だった。

○短歌

全体のレベルは例年通りだったと思うが、入賞作品はバラエティに富

み、充実していた。各々のテーマ選びに工夫があった。

入選作品は、それぞれの素材を一連の作品としてうまくまとめあげていて、魅力があった。

一席「わくわくの一年生」について

小学校に入学して、生き生きしているわが子の様子を活写して、新鮮で面白い。子供に対する愛情がさわやかに伝わってくる。

新入生になった息子の様子をいきいきととらえていて、とても新鮮に感じられた。

○俳句

例えば、佳作の「無花果」の感覚的、意味をあまり追わない作品が印象深い。

一席「月光へ」について

夕方の動物園をテーマに、五つの句が順追って連携した連作。第一句で場所や季節、時刻、漂う気配などが読み手に把握される。二句目からの三句には三頭の動物が登場する。

人間とにらみ合っているさまの駝鳥、自由気ままな虎、月夜を楽しむ風情の象。彼らの仕草や表情にどこことなく人間くささがあり、ユーモアや一抹の悲哀さえ感じ取ることができる。

第二句に姿を見せる作者は、作品全体をとおして夕刻迫る秋の動物園を抒情的に詠みあげている。

動物園の閉園前の情景を抒情たっぷりに詠んで秀逸である。

○川柳

高齢者の提出が多いため、句の内容が、これまでの生き様、回想、介護、次世代への思いなどの着眼点が多い。ロシアのウクライナ侵攻による戦争も。

応募数五三はこれまでで最少で、これからの課題として残った。入選と選外の差が見てとれたが、日頃の川柳に取り組む姿勢の差でもあるのではないかと思つた。

一席「生きる」について

早期退職（介護か病気か）をやむを得ず選択せざるを得ない作者の揺れる心境を連作とした。

表現がいい。初句、三句、四句目の表現は上手い。五句が各々独立し、テーマに沿っている。

定年前に至り、これからを、川柳により自問自答している。内容も充実、起承転結の構成も佳い。

懇談会報告

随筆部門

運営委員 福田 稔

随筆部門の懇談会は、緊張した雰囲気が始まりましたが、笑顔で終わる楽しい集いになりました。

まず、運営委員・審査委員の紹介に続いて、参加者一人ひとりが自己紹介を行いました。その後、佳作受賞者への表彰式があり、審査講評に続く懇談会では、まず、参加者それ

ぞれに、応募作品に込められた想いや、書く際に心掛けていること、審査委員への質問などを話してもらいました。それに対して審査委員や他の参加者から意見や質問が活発に交わされ、非常に充実した懇談会となりました。

最後に、審査委員からの助言を三つ紹介します。第一に、作品で何を伝えたいのかを明確に書くこと。そのためには、先にあらすじを書き、それに沿って作品を書くこと、話が脱線することを避けられます。

次に、漢字の使い方方に注意すること。漢字の分量は全体の三割程度が読みやすいのですが、同じ読みでも意味が異なる漢字があるため、注意が必要です。

最後に、作品の題名の付け方について。執筆のどのタイミングで題名を決めるかは作者によって違いますが、文章中の言葉を題名に入れる方法が紹介されました。

詩部門

運営委員 後藤 光治

一 出席者

○審査委員 杉谷昭人 谷元益男
○受賞者 福島 恵 長友聖次

美根健一 多田ゆか理
本田雅子 中武 弓
愛甲孝夫（準佳作者）

○運営委員 後藤光治

二 会次第

- (1) 審査委員・運営委員紹介
- (2) 佳作者表彰
- (3) 審査講評
- (4) 懇談会
- (5) 閉会

三 懇談会の概要

最初に自己紹介を兼ねて自身の詩にける思い等を、一名ずつ述べた。次に、出席者の詩について一作ずつ感想等を述べ合い、合評した。以下はその概要。

①「逢魔ケ刻」（福島恵）

あの世とこの世の境をも想像させる優れた作品。「骨」の描写にもう一工夫欲しかった。言葉については再考の余地もある。

②「脱皮」（長友聖次）

父の死顔の眼と蛇の脱皮の眼へのこだわりが作者から熱く語られた。そこが分かりにくいという指摘もあった。

③「嵐の後」（美根健一）

言葉も表現もしっかりしており、傑出した作品という杉谷委員の指摘。「滲み出てくるものが少ない」という谷元委員の注文もあった。

④「渡り鳥」（多田ゆか理）

独自の言葉・表現の世界がある。閉じた唇の中の世界をこれ程描けるのは相当の力量を感じさせる。精進を期待する声多し。

⑤「五つ」（本田雅子）

よくある題材であるが、うまく処理してまとまりのある感動的な詩になった。情景描写が無かったのが惜しまれる。

⑥「ブルシアンブルーの小舟」（中武弓）

最後の三行は不用という谷元委員に対して、自分はこの好きだという杉谷委員の言葉があり、意見が分かれた。人の一生の、透명한言葉による表現は秀逸という感想。

⑦「ひろみち」（愛甲孝夫）

子どもに対する愛情に感銘を受けたという感想が多かった。

短歌部門

運営委員 杉田 一成

〔出席者〕

審査委員 伊藤一彦
運営委員 杉田一成、堀越照代

一席 上米良綾子

二席 林田美紀

三席 宮本知佐子

佳作 今村文香、守矢真冬、宮崎・へば助、藪田潤子、山田幸子

準佳作 鹿沼麻歩由

〔懇談会〕

一席の人から自作を読み上げ自作の歌作りの動機などを順次述べた。その人に対する質問や感想が寄せられるという形で進行していった。

*一席 「わくわくの一年生」

会話を使った斬新なスタイルの作品。「わくわくの一年生」というタイトルのいい、という意見があった。作者自身が自作の「祈り」の短歌を読んで涙ぐまれる場面もあった。

*二席 「奥高千穂路」

作者の祖母が高千穂出身とのこと。「護衛され王女のように」「かかりつけの医院」の比喩がいい。最後の五首目の結句にタイトルの「奥高千穂路」が登場するのが良い。

*三席 「楠並木通り」

審査委員から、「操り」は「操る」に。「息を整え」は「息を整う」と終止形にした方がよいとの意見が出された。古楠のルビのこぼくは大胆とのこと。出前もちの自転車の翁に関心を持つ人が多かった。

その後、佳作、準佳作の作品も取り上げ、出席者全員で全作品を鑑賞するとともに作歌力向上のための意見交換の場となった。

俳句部門

運営委員 池袋 寛

〔参加者〕

審査委員 (田上・服部)
運営委員 (川口・池袋)

受賞者 (亜灯・大爺・森山・帯谷・帯谷母・塩月・小川・梶原・佐竹・山口)

〔進行〕

1 開会挨拶 司会進行 (川口)

2 佳作受賞者表彰

3 参加者自己紹介

4 審査講評

参加者全員の作品の講評と作者の作句意図、他の参加者の感想等

5 懇談会

① 「みやざきの文学」に応募する作品は宮崎との関連が無くてもいいのか。

(題材・テーマ等関連性なくとも可)

② 俳句人口を増やすにはどうしたらいいのか。↓時間切れ

〔感想〕 初めは緊張した雰囲気でしたが、少人数の同好の仲間でもあり、直ぐに和やかに会を進行することができました。本音が出るようになった所で時間切れとなり、残念でした。

川柳部門

運営委員 伊福 保徳

審査委員と運営委員の簡単な自己紹介の挨拶で、懇談会を始めた。

初めに、荒砂審査委員から一言。川柳は人間を描き「我はかく思えり」を表現する事であるとの持論を語られ、生成AIにも触れ、広辞苑からスマホへの便利さを説きながら、文学の明日を危惧された。

一席は荒砂審査委員、二席は吉井

審査委員と、交互に作品五句を講評され、受賞者は、一席の福島さんから順次自己紹介と、自作五句の思いを語っていただいた。

一席「生きる」、二席「林住期」は共に、歩いて来た己の人生を詠い、連作最後の五句に後悔の無い残りの刻の期待感で起承転結させていて、秀句に仕上がっていると評価された。林住期とは、古代インドの思想・四住期の三期目「五〇〜七五歳」で、人生の最高の期間だそうだ。

「民生児童委員」は、力を抜いた現場主義の作品で、過去の文学賞にも見られなかった異色の五句。作者の「守秘義務がネー」の言葉に全員が納得となった。

「普通の日」は、戦争と日常を描き、忘れかけた平和のありがたさを母の眼が見つめている。

「現在地」は、自他ともに認める硬派の作家から生れた作品。紛争にまみれるこの地球への警鐘句が並ぶ。作者が妻の言葉を紹介、「貴方の作品には漢字が多い」と。

入賞者出席五名の講評が終る頃、司会の太田さんから時間がありませんの言葉がかかった。今回、準佳作で、懇談会に出席された二名の方には、駆け足の講評となった。

次回の懇談会ではプラス一〇分、二〇分の時間をいただきたい。

令和五年度の

県民芸術祭(助成事業分)の採択及び実施状況について

本年度は周年事業等枠、チャレンジ等枠を設けて実施団体を募集しました。

本協会加盟団体(その構成・傘下の団体を含む)はじめ異分野間連携の団体などからの応募があり、次の八団体の事業を採択しました。

【周年事業等枠】

① ぐまかひー〇周年フラフェスティバル(国富町文化協会)

② 第三〇回わいわいワンパーク(延岡市文化連盟)

③ 日本舞踊 寿百重流三五周年記念発表会(延岡市文化連盟)

④ 都山流宮崎県支部 都山流尺八演奏会 都山流尺八への第一歩から百年「宮崎県における都山流の歩み」(都山流宮崎県支部)

⑤ 宮崎シティフィルハーモニー管弦楽団第三〇回定期演奏会(宮崎県アマチュアオーケストラ連盟)

⑥ みやざきチェロ協会創立一〇周年記念演奏会 みやざき一〇〇人のチェリストたち(みやざきチェロ協会)

⑦ 宮崎県オペラ協会創立五〇周年記念事業(宮崎県オペラ協会)

【チャレンジ等枠】

① 舞台のこえ 舞台のおとく俳優と舞台音響家による演劇ワークショップ

② 舞台のこえ 舞台のおとく俳優と舞台音響家による演劇ワークショップ

③ 舞台のこえ 舞台のおとく俳優と舞台音響家による演劇ワークショップ

ツプ〜(シアターラボ君と話が)

公益財団法人宮崎県芸術文化協会 第三三回(令和五年度)芸術文化賞

○概要

公益財団法人宮崎県芸術文化協会の加盟団体または加盟団体に所属する個人、その他適当と認める団体または個人で、顕著な芸術文化活動を行った団体、個人の顕彰を目的に芸術文化賞等を授賞しています。今回は、厳正な審査の結果、次の方々に授賞しました。

○受賞者と功績

「芸術文化賞」

*佐藤 守

高千穂町俳句会会長を現在まで一六年間務め、また高千穂町文化協会の会長・副会長を一二年間務め、高千穂町の芸術文化の発展に大きく貢献している。

*村上三絃道

地域で歌い継がれた民謡を次世代へ繋ぐため、これまで約百曲の採譜・音源記録を行っている。また、本県内外の学校で鑑賞教室を行うなど、三絃を通して本県芸術文化の継承・発展に大きく寄与している。

「芸術文化奨励賞」

*琴伝流大正琴琴光会

大正琴指導者の勉強会及び門下生参加の演奏会開催を目的に結成

され、昨年四月に第一八回宮崎県大会を開催し、大正琴を通しての芸術文化の発展に貢献している。

芸術文化賞を受賞して

高千穂町 佐藤 守



昨年の一月初旬、高千穂町文化協会事務局より、「受賞が決まりました。おめでとうございます。ありがとうございます」と連絡を頂き、まさか私にと半信半疑の吉報でした。

後日、宮崎県の芸術文化協会より令和五年一月二四日に開催される授賞式の案内状が届き、家族と改めて受賞を喜びました。

当日の授賞式で「個人の受賞は貴方だけです」と言われ驚き、恐縮しました。賞状を手にしたときによりやく落ち着き、感謝と喜びがあふれてきました。

私が一〇歳の時父が戦死し、苦勞して育ててくれた母も一二年前に亡くし、俳句を詠むことで生きる力が生まれ、今日に至っています。

ご推薦を頂いた関係機関の方々からお礼を申し上げます。誠に有難うございました。

今後は残り少ない卒寿の坂を微力

ながら一歩ずつ研鑽を重ね頑張つてまいります。

薪を割る斧正眼に山眠る

喜怒哀楽重ねて卒寿むかご飯

老う日々を何時も身軽に朴の花

「芸術文化賞」を受賞して

村上三絃道 家元 村上由宇月



この度は、私ども村上三絃道が芸術文化賞を受賞させていただき、心より感謝申し上げます。

大変光栄です。

村上三絃道は宮崎で音楽活動を始め、五二年。もう唄われたり、演奏されたりすることの無くなってしまった「宮崎の民謡」や、地域振興のために作られた「地域の音頭」を楽譜に起こし、学校やラジオなどでお届けする活動に力を入れています。

一九七二年に創立した村上三絃道は、津軽三味線を柱に、日本民謡や和洋コラボレーションなど、伝統音楽を大事にしながら、新しい音楽にも挑戦しています。

始まりは、津軽出身の初代家元・村上由哲が宮崎の風土に惚れ込み、西日本のみなさんに津軽三味線の良さを広めたいということからでした。

津軽三味線の演奏団体として知っていたただく機会の多い団体ですが、宮崎の唄や西日本にある支部の民謡を掘り起こしたりと、地元の唄を大切にしながら活動しております。

西日本を中心に熊本県、長崎県、愛媛県、高知県、広島県と一四支部ありますが、みんなでいただいた賞だと一門一同喜んでおります。

宮崎の皆さま、たくさんの方々に「日本の音楽」で喜んでいただけるように、ますます精進して参ります。

「芸術文化奨励賞」を受賞して

琴伝流大正琴 琴光会会長 上原 良子

この度は「芸術文化奨励賞」を受賞し、会員一同喜びに浸っております。

琴光会は、平成七年に結成し、会の名称は「光はみんなに温かく平等に照らしてくれる」ということから命名しました。結成した後は、長野県の本部から講師を招いて講習会を開き、指導者のレベルアップを図ってまいりました。また、県内の先生が心一つにして県大会を開催することとなり、今年で一九回目を迎えます。琴光会の最近の活動として、令和三年に宮崎市民文化ホールで開催された「第三五回国民文化祭」への参加、宮崎市芸術文化連盟主催の「芸能まつり」への出演があります。



琴光会
を結成し
て二九年
間大正琴
を続けて
こられた
のも、琴
光会の仲
間がいて
くれたか
らと感謝
しています。
これも
県大

会、ボランティア活動を通じて仲間との交流を図りながら、演奏技術の向上を目指し、より一層励んでいきたいと思っています。

会員だより

宮崎県アマチュアオーケストラ連盟の活動状況

理事長 岩切 敏

本連盟は、地域の音楽・芸術文化の発展に寄与することを目的として、平成一年に県内アマチュアオーケストラ三団体に設立されました。以下、三団体の概要と最近の活動内容について紹介します。

*宮崎シティフィルハーモニー管弦

楽団

令和五年度で創立三〇年の節目を迎えました。市民の皆様から広く親しまれるオーケストラを目指して活動しています。定期演奏会やファミリーコンサート、スクールコンサートのなどをおして、地域音楽文化の向上を目標に日々研鑽しています。

○ファミリーコンサート（六月）

○スクールコンサート《小中学校

四校》（一二月）

○創立三〇周年記念定期演奏会、

記念誌の発行（一二月）

*延岡フィルハーモニー管弦楽団

市民の皆様からは「延フィル」の愛称で親しまれ、地域とのつながりを大切にしながら活動しています。地域貢献活動として、市内小中高校等の校歌をオーケストラで演奏・録音したCDを作成し、各学校や同窓

会へ寄贈する活動を行っています。

○室内楽の夕べ（六月）

○第二〇回記念定期演奏会（一二月）

○第九とクリスマス夕べ《賛助
出演》（一二月）

*宮崎ジュニア・オーケストラ

昭和四〇年に創立された青少年による管弦楽団で、団員は宮崎市や県内各地から参加しています。令和五年度は宮崎ジュニアを多くの方に知っていただきたいと、街中でのミニコンサートを積極的に実施しています。

○宮崎国際音楽祭5000円コンサートの日出演（五月）

○ミニコンサートの開催（九月）

○宮崎東病院訪問コンサート（一
一月）

○春の音楽祭出演（令和六年二

月）

県からのお知らせ

第二九回宮崎国際音楽祭の概要

今回で第二九回を迎える宮崎国際音楽祭は四月二十九日から五月十九日までの二二日間で開催します。今回は、「ひなた広がる、音楽の輪。」をテーマに、太陽の国みやぎを照らす日の光のように音楽で心のひなたを広げたいという思いを込めて、多彩なプログラムで構成されています。皆様の御来場を心よりお待ちしております。

○期間 令和六年四月二十九日（月）
～五月十九日（日）

○会場 県内公立文化施設ほか

○主なプログラム

〔西都公演〕

三浦文彰の「リクエスト・コンサート」
日時…五月三日（金・祝）一
五時開演

〔日南公演〕

「NADESHIKO 弦楽八重奏団」
日時…五月四日（土・祝）一四
時開演

〔宮崎公演①〕

エクスペリメンタル・コンサート
「クラシックの20世紀」
日時…五月五日（日・祝）一五

時開演



宮崎シティフィルハーモニー管弦楽団



延岡フィルハーモニー管弦楽団



宮崎ジュニア・オーケストラ

時開演

〔日向公演〕

シリーズ「Oh! My! クラシック」舞の海秀平は語るく技、そして音楽

日時：五月六日（月・振休）一五

時開演

〔都城公演〕

二人の俊英、二人の巨匠「響き合う音の世界」

日時：五月一日（土）一五時開演

〔宮崎公演②〕

マイスキー・トリオ「親子で奏でるアンサンブル」

日時：五月二日（日）一五時開演

〔延岡公演〕

シリーズ「ポップス・オーケストラinみやぎ」もう一度聴きたい、想い出のあの曲をオーケストラで

日時：五月一八日（土）一五時開演

〔宮崎公演③〕

マイスキー×宮崎国際音楽祭管弦楽団「新世界の協奏曲、そして至高の交響曲」

日時：五月一九日（日）一五時開演

〔特別企画〕

徳永二男「ふれあいキャラバン・コンサート」

日時：五月一日（水）～五月九日（木）

会場：日之影町、五ヶ瀬町、高千穂町、綾町

〔ストリート演奏会〕

〔完熟☆金管五重奏団〕

日時：四月二九日（月・祝）時間未定

日時：四月二九日（月・祝）時間未定

会場：宮崎県庁五号館前広場（雨天時：オルブライトホール）

※インターネットから予約ができません。メディキット県民文化センターのホームページからアクセスいただき、予約をすると「セブンイレブン」で受け取りが可能となります（二四時間対応で座席指定もできます）。

○お問い合わせ先

公益財団法人宮崎県立芸術劇場

電話 0985 (28) 3208

○チケット取り扱い

メディキット県民文化センターチケットセンター

電話 0985 (28) 7766

ほか、各プレイガイドにて販売しております。詳しくは、メディキット県民文化センターホームページを御覧ください。

令和五年度
アートカウンシルみやぎ
の活動を振り返って

プログラマディレクター 山森 達也

令和五年度はアートカウンシルみやぎとしては最大規模の事業「みやぎきみんなート2023」を開催し、二日間で五二〇七人の来場者が

あった。また、今年で三年目になる短歌みやぎ事業では、俳優の星野真里さんをゲスト歌人に招いた「星野真里と、旅する短歌」を開催した。両事業はともに全国的な反響が大きかったが、アートカウンシルみやぎはイベント事業がメインとして捉えられてしまった面も否めない。アートカウンシルとしての通常業務としては相談件数が二〇〇程度となり、昨年対比で見ると減少傾向にある。これは長いコロナ禍が終わり、自主的に事業が行われているために減少したと思われる。

令和六年度は文化庁の創造拠点形成事業が終わり、県予算のみで運営される初の年度となる。イベント事業は現在予定がないため、県内各地とのネットワークの強化、アート人材の育成に力を入れたいと考えている。アートカウンシルが文化芸術を支える中間支援であるならば、現場の人材だけではなく、文化芸術のファンを育てていくことも重要な業務であると考えている。芸術系の大学、専門学校のない宮崎県では、教育機関に代わるような文化芸術のラボラトリーが必要であり、当面はアートカウンシルみやぎが担うべきだと考えている。

編集後記

野焼後の畔を抜け支流の川沿いを歩くと、川面の光を散らし騒めかせ

ている鯉の群、春の到来を感じる。新型コロナウイルスが五類に変更され、各地域での「四年振りに開催されたイベント」との謳い文句の下、当初は本当に大丈夫なのだろうかと思心暗鬼の思いも無きにも非ずであった。

しかし、久しぶりのイベントの開催による地域の人々の盛り上りの様子に明るい兆しを感じた。

昨年六月から編集委員を引き受け、県内の多くの文化芸術の活躍の有り様を改めて知る事となった。春の日差しとともに多くの地域の方々が、再び活躍される事であろう。人との触れ合いの場が広がる事により、頑張る力の源がより強固になるのだろう。

今まで躊躇して出掛けなかったイベントにも楽しんで参加したいと思っている。
(齋藤登美枝)

みやぎき芸文協 第124号

令和6年3月19日発行

編集・発行

公益財団法人 宮崎県芸術文化協会

〒880-0804

宮崎市宮田町3番46号 県庁9号館

TEL 0985-31-2780

FAX 0985-31-2782

印刷所 有限会社鉾脈社